

早稲田商学第 454 号
2019年3月

消 息

鵜飼信一先生をお送りするにあたって

鵜飼信一先生は、2019年3月末をもって早稲田大学を定年退職されます。先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

鵜飼先生は、1971年に早稲田大学第一商学部をご卒業後、同大学院商学研究科修士課程・博士後期課程に進学されました。その後、三菱総合研究所等での勤務を経て、1986年に商学部専任講師に着任され、1988年助教授、1994年に教授に昇任されました。

学内においては、産業経営研究所所長、インキュベーション推進室長、(公財)本庄早稲田リサーチパーク本庄早稲田経営塾塾長、早稲田実業学校副校長などの役職をお務めになりました。学外においては、大田区優工場審査員を1995年から2018年までお務めになったのはじめとして、川崎市、台東区など多くの地方自治体の産業振興に関わる委員会の委員長をお務めになるとともに、中小企業庁や経産省関東経済産業局の中小企業支援事業の委員もお務めになりました。

先生の研究業績につきましては、本号に横山先生が寄稿された消息をご参照頂ければと思いますが、業績に関して一言申し上げますと、先生は、学術的な著書・論文の他に、業界関連の雑誌などに多く寄稿されており、実務との接点をつねに保ってこられました。そうした点では、早稲田大学の三大教旨のひとつである「学問の活用」を実践されたといえると思います。

鵜飼先生の研究者・教育者としての特徴を一言で要約するならば、「常にものづくりの現場で、研究・教育を行った」ということになると思います。先生は、毎年50件以上の工場見学をされるとのことですが、教員室などでお会いして雑談している際に、「こういう面白い工場があるけど、知ってるか」とか「どことこの会社に見学に行ったら、あんたのゼミの先輩だったよ」というお話しをしばしば伺いました。

先生の最新のご著書『日本社会に生きる中小企業』(中央経済社刊)は、さまざまなテーマについて論じられており、大変知的刺激に満ちた興味深い内容です。なかでも、

太平洋戦争時に文部省から東京六大学野球リーグ解散命令が発令された後の早慶戦開催に対する、慶應義塾大学の小泉信三塾長と早稲田大学の田中穂積総長の対応の違いに関する記述は、先生のお人柄あるいは信念を端的に示していると思われます。具体的にいうと、小泉塾長は、文部省の命令にもかかわらず、出征前の学生による野球の早慶戦開催を申し入れたが、田中総長はこれを認めなかったということです（実際には、田中総長の許可なしで試合は実施され、これが後に「最後の早慶戦」と呼ばれるとのことです）。先生はこれについて婉曲的・紳士的な表現をされていますが、「早稲田の田中総長には義侠心（男気といってもいいかもしれませんが）がなかった」と暗に批判されていると私は理解しました。

当時の田中総長とは対照的に、鶴飼先生は義侠心のある義理人情に厚い先生でいらっしゃることは、多くの方々をご存知のところだと思います。そうした先生のお人柄ゆえに、年間50件以上もの見学を受け入れてくれる会社・工場があるのだと思います。

なかば個人的な事柄になりますが、私が学部長に就く前から、先生には折に触れて学部運営に関する助言を頂いておりました。今後はそうした助言を頂けないと思うと、さびしくまた少し心もとない気がします。

鶴飼先生は、今も大変お元気ですが、大学の規程により、この3月をもって定年退職されます。しかし早稲田で授業を担当されなくなっても、大学以外のお仕事はこれまでどおりに続けられるものと思います。鶴飼先生が、今後とも健康に恵まれ、いつまでも工場の現場に足を運べることを祈念するとともに、先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深く感謝申し上げて、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会長
藤田 誠